論文審査の結果の要旨

氏名　趙昶佑

中国 20 世紀文学の課題とは国民国家の建設であった。それは王朝体制や軍閥独裁を打倒する政治革命であると同時に、大家族体制を解体する自由恋愛運動であり、革命と恋愛との二重奏こそが、現代中国文学における最大のテーマであったのだ。そのような中国文化界にあって魯迅(ルーシュン、ろじん、1881 ～ 1936)から巴金（パーチン、はきん、1904 ～）へと、中華民国期から人民共和国鄧小平時代へと、行動的リベラリストの系譜は絶えることなく続いてきた。魯迅は 20 世紀初頭にはヨーロッパ・ロマン派の影響下で、晩年の 30 年代にはマルクス主義やトロツキー文芸理論の影響下で清朝専制体制や軍閥支配に抵抗し、巴金は青年期にはアナーキズムの影響下で家と決別して自由恋愛と革命運動に挺身する青年たちを描き国民党独裁体制を批判し、文化大革命終息後の 70 年代末から 80 年代にかけては人類主義の視点から共産党の独裁体制に異議申し立てをしたのである。

人民共和国建国後の巴金は、一時、共産党への協力を余儀なくされたが、文革で悲惨な体験をしたのちは、「私は加害者」と告白し建国以来の粛清に協力しついには文革の発動を許してしまった知識人の責任問題を提起してもいる。

「中国の良心」と称される巴金をめぐっては、中国はじめ日本・韓国・欧米において多数の研究者がさまざまな角度から研究を重ねており、東大所蔵の巴金関係書だけでも 346 点、そのうち中文および英文の巴金研究書は合計 33 点にものぼっている。このような重厚な巴金研究に今回、趙昶佑君による「異邦体験・異邦人交流」という新しい視点による巴金論が仲間入りした。

本論文は巴金のフランス・日本における異邦滞在経験と、中国国内における異邦人交流体験に基づく作品群に注目しつつ、巴金のアナーキズム・インターナショナリズムの形成を論じている。第 1 章では 1925 年に開始される巴金とアメリカ人アナーキスト、エマ・ゴールドマンとの文通による交流を考察し、第 2 章では巴金のフランス留学（1927 ～ 28）体験を分析論証し、第 3 章では主に 1920 ～ 30 年代上海における朝鮮人亡命者との交流を論じ、第 4 章では巴金の大杉栄・古田大次郎・石川三四郎ら日本人アナーキストへの関心と、1934 年の横浜・東京遊学体験を考察している。

本論文の主な成果は次の通りである。

（1）外国アナーキストとの交流に関しては山口守・樋口進・Olga Lang、フランス体験に関しては坂井洋史・山口・陳思和、朝鮮人との交流に関しては嶋田恭子・沈容澈・陳丹晨、日本遊学に関しては藤井省三・新谷秀明らによる先行業績等によく学びつつ、巴金の中華民国期における「異邦体験・異邦人交流」のほぼ全容を解明した。

（2）フランス体験を契機として巴金が執筆するポグロム（ロシアにおけるユダヤ人迫害問題）と亡命を題材とする作品の背景を、実在のユダヤ人テロリスト、シュワルツバーに関する具体的な資料により明らかにした。フランス体験により巴金が中国国内の朝鮮人亡命者への連帯感を深めていったという指摘も新鮮である。

（3）フランス体験と主に上海フランス租界に多く集まった朝鮮人亡命者との交流に関する考察に基づき、朝鮮人革命者をモデルとする短篇小説「髪的故事」と長篇小説『火』を分析し、巴金が自分の国に亡命している異邦人の境遇を中国人読者に客観的に伝えようと努めていた点を析出した。また韓国人アナーキスト鄭華岩の回想に注目した点は、特に評価に値する。

本論文の議論は中華民国期（1912 ～ 49）に限られており、中華人民共和国期（1949 ～）における巴金の朝鮮戦争（1950 開戦、1953 休戦）従軍体験、文革終息後の日本・フランス訪問などの「異邦」体験にまでは考察が及んでいない。また論文としての形式・構成において未熟な点も散見される。

だが上記（1）～（3）を中心に顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。